

ふたなり悪魔に魅入られたシスターと

逆アナルのオナホ穴に墮とされる司祭候補君

シーン1

「くっ…すごい魔物の数っ！ みんな、もうちょっとだけ耐えてっ！」

「ううっ…この悪魔の娘、強いっ…でもっ、あたしが抑えないと…っ！」

「神様…力を貸し与えてください…セイドリック・フォース！」

「扉の中！ 急いでっ！」

「砦の結界はもうすぐ完成するからっ！ 司祭君さえ…中に入ってくればっ…！」

「キミのことはあたしたちが、命がけで守るからっ…だからっ、急いでっ！」

「扉の、中！…くうっ！」

「よし、これでっ…結界が張り終えるまで、絶対に、ここは通さないんだからっ！」

「どうしたの？ なんだか落ち込んでるように見えるけど…！」

「……何を言ってるの！ キミのおかげでこれだけの人たちが助けられたんだよ？」

「今だって司祭君の結界のおかげで、皆が守られているんだから……キミは胸を張っていいんだよ」

「それでもまだ落ち込むっていうんなら……そうだ、あたしの手伝いをしてくれないかな？」

「助かった人たちの健康状態の確認と、戦闘で傷を負った人たちの把握とかしないといけないんだよね」

「……もちろん、皆を助けるために犠牲になった仲間のことも心配だけど……」

「今は、治療が必要な人を優先することも、大事だと思わない？」

「という訳で、司祭君の手を借りたいんだけど……ダメかな？」

「え？ あー、切れちゃってたね。あの悪魔と戦ったときかな？」

「いろいろやるが多すぎて、全然気づけてなかったみたい。回復魔法ありがとう！」

「じゃあ、行こ？ 他にも怪我してる人を回復して回ろう。あたしも少しはつかえるからね」

「どうしよ、どうしよう!? これ、なんなの？ 呪い？ 呪いなのかな?？」

「昨日まではなんともなかったのに……あたし、このままどうなっちゃうんだろう？」

「変な感じでもむずむずしてこれじゃあ戦えない……司祭君、あたし……どうしたら？」

「……ごっ、ごめんねっ！取り乱しちゃって……その、今朝起きたら……」

「あたしの体に変なのが生えてきて……自分じゃどうしたらいいか、全然分かんなくて……」

「司祭君なら、何か分かる？ ……ちょっと、恥ずかしいけど……これ、見てもらっていい、かな？」

「……これ、見える？ 司祭君は、これなんだと思う？」

「あたしの股間から急に生えてきて……その、感覚も共有されてるみたい、なんだ」

「試しにさわってみただけど、ふれられてる感覚もあるみたいで……なんだか熱も持ってるし、硬くて……あたしの下着から飛び出しちゃってるし。やっぱり、呪いかなにか、なのかなあ？」

「……キミでも、どうしようもない感じ？ ……うーん、困ったなあ……あたしが使える回復魔法じゃ効果なかったし……今、岩の中には協会関係の人もいないから、解呪できる人も居ないってことだもんね……」

「これ、どうしたらいいと思う？」

「そう、だね……今のあたちたちじゃ、この呪い？ に対抗できる方法がないってことだもんね……」

「はあ……困っちゃったなあ……」

「それにしても、こんなものをあたしに生やしてなにがしたいんだろう？ まあ大きすぎ

て歩きずらいし、聖導衣の上からでもはつきり形が分かっちゃうから、皆に変な目で見られちゃうのはどうかしたいけど……」

「こんな大きい隠せないし……せめて小さくなってくれたら、いいんだけど……」

「え？ それ、どういうこと？ キミはコレが何なのか、知ってるの？」

「又くって何？ それをしたら、小さくなるの？ ……って、どうして目を逸らすの？」

「なにか、言にくいことでもあるの？ 方法を知ってるなら、教えてよ、司祭君……」

「うん……大丈夫、ちゃんと聞くから、キミの知ってる情報を教えてくれると、とっても助かるよ」

「だん、せい、き？ えっ！ おちんちん、これがそうなの？ あっ……うん、じゃあキミにも同じような物が付いてるんだね……でも、全然大きさが違わない？ ……うん……興奮、すると……おっきくなっちゃうんだね？」

「なる、ほどそれが今のあたしの状況ってことなんだ」

「それで、さっき、キミが言ってた……又くって、なんのこと？」

「……えっ、えっ、ええっ！？ オナ、ニー？ 性行為、じゃなくて……自分の手を使って、刺激を……？」

「その……赤ちゃんの元……？ を出しちゃう、行為……そ、そんなこと……してるんだ……男の人って……じゃあ、その、あたしから生えてるコレも……手で刺激を与えてあげれば、普通の大きさに、戻るってことなのかな？」

「その、オナニー？ したことはないから……全然分らないんだけど……キミは、したこ

と、ある、の？」

「えっ！　そ、そうなんだ……キミでも、そういうこと、してるんだね」

「あっ、ごめんなさいっ！　何か、問題があったとか、そういうことじゃなくて……あたしが何も知らないだけだから」

「その、恥ずかしい思いをさせてしまって、ごめんなさい」

「そうだね……問題は、これをどうするかっていうこと、だもんね」

「恥ずかしいけど……このままで生活するのは難しいから、どうにかしないとイケないと思うんだよね」

「……男性器が又いて小さくなるっていう話なら、もしかしたらそれで呪いが消せるかもしれない」

「司祭君……お願い、聞いてくれないかな？」

「キミにしか頼めそうにないことなんだけど……」

「ちゃんとできるかどうか分からないから……あたしのこれ、お、おちんちんをオナニーでおさめてほしい……。一緒に、ええと……あっ、そのっ！　恥ずかしいことだっていうのは、分かるんだけどっ！　呪いが解ける可能性があるんなら試してみたいし……」

「ダメ、かなあ？　こするって、言葉だけで聞いても、合ってるかどうか分からないから……それなら、やり方を知ってる司祭君に見られながら、やり方を直接教わりながらやった方が……絶対いいと思うんだよ」

「ね？　あたしを助けると思って……おねがいっ！」

「うん、ありがとう……本当に助かるよ」

「じゃあ、あたしのコレ……見せながらやるから、司祭君のも見せて？」

「……だって、見ながらじゃないと分からないじゃない？」

「……キミが男性器を使って、どうやってオナニーするか、あたしに教えてくれた方が、間違いないから……わあ、男性器って……普段はそんな風になってるんだね……あたしの、又いたらそれくらいの大きさになるのかな？」

「司祭君のって、あたしに付いてると全然違うね……その……司祭君の男性器の方が、かわいくてあたしは好きだな」

「あっ、そうだ、司祭君？ どうせなら、聖なる力を直接流し込みながら、オナニーするっていうのはどうかな？」

「……うん、あたしに付いてるコレを、司祭君の手で触って聖なる力を流し込んでくれない？」

「もしかしたら、呪いが解けるかもしれないでしょう？」

「それだと、司祭君が自分でオナニーできないから、あたしが代わりに手でこすってあげるね。それなら、すごく近くでキミのオナニー見えるし、すごくいい案だと思うんだけど……どうかな？」

「うん……キミの男性器に、触るね……司祭君も、あたしのに、触って……」

「あっ……なに、これ……自分で触ると、全然違う……感じ……」

「あっ、キミのも……おっきくなってきた……それで、どういうふうに、こする、の？」

「んっ♡……あうっ……くっ……手で、握り込むようにして……くっ……男性器をこすり

あげる、感じ……なんだね」

「あうっ……すごいっ……こんな感覚……初めて……くっ♡……んっ♡……んうっ♡♡……はあっ、はあっ♡ おなじ、ように……んっ♡……キミのも……こすっていくね……んっ♡……ううっ……あっ♡……はあっ、はあんっ♡」

「うっ……ううっ……んっ♡ あっうっ、んっ♡ んんうっ♡♡ あっ、くっ……んっ♡んっ、んうっ♡……うっ、うっ、くうっ♡♡」

「司祭君の男性器い、硬いよお……はあはあ♡ 手の中でビクビクって、してるっ……くっ！」

「あたしのも、すごい震えて、る……？ んうっ♡…何か、こみ上げて……きてっ……んんうっ♡ あっ♡ ああっ……っ！」

「お腹の下の方……熱いっ……くっ、ううっ……なにかっ……上がってっ……んっ、んんっ♡！」

「あっ、いやっ……なにっ、これえっ♡……あっ♡……司祭君のもっ、ビクビクってっ……んっ、んんうっ♡！ んあっ♡！ あああっ♡♡♡！！」

「あっ♡ あうっ♡……くうっ……ああ、すごい、出てるう……熱くて、ドロドロの精子……はあ、はあ♡ はあ♡ これで……ちゃんと、又けたって、こと……？ はあ、はあ、はあ♡」

「じんじん痺れてる感じ、するう♡……はあ、はあ♡ はあ♡……んあ……ふう♡」

「司祭君も……一緒に、出してくれたんだね……はあ、はあ、はあ♡……これで、あたし

の、男性器も……小さく、なるの、かな？」

「……んっ……大きいまんま、みたいだね……でも、ちょっと小さくなった、かも？」

「はあっ、はあっ♡……じ、じゃあ、続けていけば……小さくなるのかな？ キミのも、まだ大きいままみたいだし……」

「もう一回、又いちゃえば、もっと小さくなるかもしれないよね……はあ、ふう♡」

「あたし的には続けたいんだけど……司祭君にまたシコシコ、してもらってもいいかな？」

「……自分でこするより、出せそうな気がする、から……」

「んっ……はあ、はあ、じゃあ、いくね……っく！ んんっ♡ さっきよりっ、こすられると……ビリ、ビリっするうっ♡」

「んんっ、あっ、あうっ♡……へ？ 一回、出したあとは、敏感に、なるものなの？ くっ……んんっ、はあはあ、ううっ♡」

「んっ♡ あっ♡ あうっ……くっ、ううっ……ああっ、んっ♡ んんっ♡♡……はあっ、ふうっ♡」

「んんあっ……くっ、んんっ、あっ、あうっ♡ あうんっ♡！ んんっ♡！」

「こんな感覚っ、知らないっ……くっ、ううっ……あっ♡ あっ♡ あうっ♡ くっ、んんっ、んんあっ♡！」

「これが、オナニー、なんだね……ううっ……体、震えちゃうし、あうんっ♡！ さっきよりも感覚が鋭くなって……」

「るうっ……んっ♡！ んんうっ！ あっ、あうっ、んんっ！ またっ、こみ上げて、来

てるうっ……♡

「はあはあ♡……んんあ♡……出そうで、出ない感じ………続いているのお………はあ、はあ♡ううっ♡」

「これえ………どうしたら、いいの？」

「動きを、もっと早くしたら………？ なる、ほど………男性器に、もっと刺激を与えたら、いいんだね」

「分かったよ、じゃあ、あたしの男性器い、もっと早くシゴいて、いいよ………あたしも、キミの、いっぱいシコシコするから………うっ、くっ、んんっ♡ あっ、あっ♡ あうっ………んんんっ♡♡♡！ あっ♡ それっ、すごいっ、すごいよおっ♡！ はあはあっ♡んんっ♡♡！」

「はあはあっ♡ はあはあっ♡ くっ、ううっ、こみ上げて、きてるうっ！ お腹の奥う、きゅうっしてるよおっ………あっ♡！ あっ♡！ ああっ♡♡♡！」

「大きいのっ、くるっ♡！ うっ、くうっ♡！ またっ、出ちゃうっ、出ちゃうよおっ♡！ ああっ♡ 司祭君っ、あたしっ………ひっぐうっ！」

「んんっ♡！ んんんんんんんんんんっ♡♡♡！！」

「はあああ………♡ んんっ、ああっ………なに、コレえ………なんだか、とっってもお………はあ、はあ♡ 変な、感覚う………♡」

「すっごい、いっぱい出てるう………♡ んんっ、はあ、はあ、はあ………一回目よりも、多い、かも………」

「キミも、一緒に出せたんだねえ………♡ ああ………すっごい、臭い………んっ♡ はあ、

はあ、はあ……ああ……うっ……ふう……♡」

「二回、出したらあ……小さくなったかな？ だったら、もう一回、しよっか？」

「オナニーってすごいんだね……♡ はあはあ♡ こんな感覚、味わったら……やめられなくなりそお……はあ、はあ……♡」

「あ……司祭君の男性器、小さくなったねえ……あたしのも、出したあとは少し、小さくなってる、から……きつと、もう一回出せば、大丈夫だよ♡」

「だから、一緒に、シコシコ、しよ？ ね？ 司祭君♡」

「シコシコ♡ シコシコお……♡ んうっ、あうっ、あっ、あんっ、んんっ、あうあっ！ すっごいっ、んんんっ！ あっ、あっ、あっ、それっ、気持ちいいっ、気持ちいいっ」

「おちんちんからっ、頭までっ、一気にっ、ビリビリしたのが、突き抜けてっ……くうんっ♡ はあはあっ、はあはあっ、んんっ！ あっ！ あっ！ あうっ！ うぐっ！ んんっ♡ いっぱいっ、シコシコっ、してえっ！」

「あたしもっ、キミのを、気持ちよくするからあっ♡ あっ、んんんっ！ ああっ、はあはあ……司祭君の男性器い、大きくなってきたあ♡ これで、また、一緒に、出せるよ……♡ っ、あうっ、それっ、気持ちいいっ、気持ちいいっ！」

「うっ！ ぐううっ！ あっ♡ あっ♡ あっ♡ またっ、上がってきてるう♡」

「くっ♡ んんんんっ♡ またっ出ちゃうよっ……飛んでっちやいそうだよおっ！」

「あうっ！ んんっ！ んんっ！ あっ！ ああっ！ んんんんっ！ トんじや

うう、ううっ！」

「んんんっ！ んんんんんんんんんっ！！！！！♡♡」

「あっ♡ ああっ♡ いっぱい……出てるう……はあはあ、はあはあっ、あうっ♡
んっ……はあはあ、はああ……」

「頭あ、チカチカしてるのお……はあ、はあ、はあ……はあ、ああ……ふう……」

「あっ……見て……司祭君……はあ、はあ、あたしの、おちんちん……やっと収まってく
れた、みたい……」

「はあ、ふう……よかった……これで、ひとまず、呪いは抑え込めた、ってことなのか
なあ……はあ、はあ……」

「司祭君のおかげだよ……助かっちゃた……ふふっ♡」